

# 土曜 ライフ・楽しむ

## わたし色

生活情報誌「悠悠と」  
編集長・真鍋康利さん



### 「酒は飲んでも…」白戒込めて

先日夜遅く携帯電話が鳴りました。急ぎの仕事があり、事務所で頭をひねっている最中で、時計を見るともう11時を過ぎています。こんな時間の電話にあまり良い知らせはありません。嫌な気持ちで電話を手にとると、表示されたのはすいぶん懐かしい名前です。一瞬、共通の知人の訃報かと頭によぎりました。

恐る恐る電話に出ると、その彼は少しろれつが回らない口調で、「久しぶりに声を聴きたくなって……」と言います。飲んでいろいろしくすでできあがっている様子です。60代後半、数年前に仕事を終え、悠々自適とのこと。当方の事情を全く顧みずグダグダと近況報告をし、さっき頭に浮かんだ知人らの近況など取り留めない話題を繰り出します。とりあえず訃報ではなかったので安心したものの、腹が立ってきました。



そう言えば彼は昔から酒に飲まれるタイプで、様々な武勇伝があります。そのひとつ、彼のいた会社と私が勤めていた会社が共同である催しを開催したときのことです。彼は現場責任者でしたが、さながら借りてきた猫のよう目立ちません。しかし、すべてを終えた後の慰労会では、まるで別人のように元気いっぱい、手際よく宴席を取り仕切ります。「その元

気が屋間発揮できればもっとうまかったのに」とかかった声に、自信満々「こちらが本業ですから」と即答していました。



ある飲送会で一緒になったときも、元気に飲んで騒いでいました。小樽行き最終に乗ると言い、へべれけの彼は札幌駅までのつもりでタクシ―に乗りました。数日後電話があり、あの日気づいたら小樽駅前で、タクシ―代金を払ったらスッカスカになったとのこと、小樽行きの最終に乗りたと言ったつもりが、「小樽」だけを口にして寝入

ってしまったようです。ひどく悔やんでいました。

コロナの時代、宅飲みをする人が増えているようです。帰宅の時間を気にする必要がないので、飲みすぎることも多いと聞きます。

彼は宅飲みで酔いすぎて手当たり次第に電話したか、誰かと間違えて私に電話したのかもしれません。しかし相手は何をしているか見えない電話は、せめて常識的な時間にしてほしいですね。シニアは早めに寢床に入る人も多く、午後9時ごろまでが限度でしょう。夜8時に寝て、朝4時には起きて散歩するという友人には、必ずメールで連絡するようにしています。

酒は飲んでも飲まれるな、と昔からよく言われます。私自身も白戒を込めて、決して正体不明になるまで飲みすぎないことを宣言します。